

カルロス・ルイス・サフォン著、木村裕美訳「天使のゲーム」上、集英社文庫、集英社 2012年7月25日刊を読む

1. その年ごろのぼくにとっては、紙とインクで出来たものだけが、かけがいのない友だちだった。学校では、近所の子たちより、ずっと早く読み書きをおぼえた。同級生の目にはインクのしみにしか映らない意味不明のページに、ぼくは光を、街角を、人びとを見た。言葉と、そこに秘められた謎に夢中になり、この家からも、この都からも、この不穏な日々からも救ってくれる、かぎらない世界へのとびらをあける鍵に思えたのだ。このままでは先に行ってもいいことはない、子どものぼくですら予感できる日々だった。
2. 父は、家に本があるのを嫌がった。解読不可能な文字のほかにも、なにかしら父の気にさわるものがあつたのだろう。十歳になったら、おまえを働かせるぞと、事あるごとに言われた。おまえの気を散らしているものを頭からぜんぶ追いはらえ、そうでもしないと、物も食えないろくでなしになりさがるぞ、と。
3. ぼくはベッドのマットレスのしたに本を隠し、父が出かけるか、眠るかしたのを見はからっては、本をひもといた。いちど、夜読んでいるときに見つかってしまい、ものすごい剣幕で怒られた。父はぼくの手から本をもぎとって、窓から放りなげた。
「こういうくだらんものを読んで、また電気のむだづかいをしてみろ。こんどこそ、ただじゃ、おかないからな」
4. 父はケチな男ではない。家がいくら貧乏でも、近所の子みたいに駄菓子が買えるように、たまには小遣いをくれた。息子が甘草の棒キャンディーや、ヒマワリの種や、キャラメルでも買っているものと、父は思っていたらしいが、ぼくは小遣いをコーヒー缶に貯めては、ベッドのしたにしまっておいた。それで貯まった金が四リアルか五リアルになると、父に内緒で本を買いに走った。
5. サンタアナ通りにある「センペーレと息子書店」が、バルセロナじゅうで、ぼくのいちばん好きな場所だった。あの、古びた紙とほこりのにおいのする店は、ぼくの聖域であり、隠れ家でもあった。書店主のセンペーレは、ぼくを店の隅の椅子にすわらせて、好きな本を自由に読ませてくれた。本代は、めったにうけとってくれなかったが、ぼくは店をでるまえに、やっと貯めた金を、彼に見つからないようにカウンターにこっそりおいていった。といつても、ほんの小銭でしかない。あんな、なげなしの金で本を買おうと思ったら、タバコを巻くペラペラの紙の本がいいところだ。帰る時間になると、ぼくは足と魂をひきずるようにして店をでた。自分の自由になるものなら、あのまま書店に住みついてしまったらと思う。
6. いつかのクリスマスとき、センペーレは、ぼくの人生で最高のプレゼントをしてくれた。古びた一冊の本、さんざん読みかえした感じの本だった。
グランデス・エンペランサス
『大いなる遺産』チャールズ・ディケンズ作……と、ぼくはタイトルを読んだ。
センペーレには、店によく出入りする作家の知り合いが何人かいる。書店主がその本をいつも

大事そうにしていたので、ぼくはてっきり、“チャールズさん”というのも、そんな友人のひとりかと思っていた。

「この人、お友だちですか？」

「一生の友人よ、きょうからは、きみの友だちにもなったんだよ」

7. その日の午後、父に見つからないように服のなかに本を隠して、ぼくは“新しい友だち”を家につれて帰った。

8. 雨がちの、鉛のようにどんよりしたあの季節に、ぼくは『大いなる遺産』を九回つづけて読みかえた。ひとつには、ほかに読む本が手もとになかったこと、もうひとつには、これ以上にすごい本があるとは思えなかったからだ。“チャールズさん”は、もしかしたら、ぼくひとりのために、この本を書いてくれたんじゃないか、そんなことまで考えるようになった。そのうちに、ディケンズ氏なる人物がやったことを、この人生でなんとしても学びたいと、ぼくは、はっきり自覚した。

P59 ~ 61

[コメント]

夏休みの読書の2冊目。カルロス・ルイス・サフォンの前著「風の影」と重ね合わせて読むと、「風と影」の内容がよくわかり趣深い。木村裕美さんの翻訳も前著同様ていねいでわかりやすい。

— 2012年8月3日林 明夫記—